

『信仰と行いパート5』 ヤコブの手紙 2 章 14～26 節

1. 信仰と行い

ヤコブは1章で、国外に散っていたユダヤ人キリスト者に宛てて、「御言葉を実行する人になりなさい」と勧めました。そして、その具体的な実践の一つとして、「人をえこひいきしてはいけない」ということを取り上げました。今日のところでも、「信仰」が生きたものとなって全うされることを勧めています。

14 節からは、「行い」と「信仰」の関係が語られています。14～26 節でよく繰り返されている言葉が二つあります。一つは「信仰」で、11 回出てきます。もう一つは「行い」で、14 回出てきます。そして「信仰」と「行い」が一緒に出てくる箇所が 10 回に及びます。ヤコブは「信仰」と「行い」との関係をどのように理解しているのでしょうか。

ヤコブは今回の箇所で、「行いのない信仰」を「役に立たない」(14, 16 節)「死んでいる」(17, 26 節)「無益」(20 節)と厳しい言葉で指摘しています。「行いのない信仰」というと、愛の足りなさを覚えているキリスト者は、自分のことのように感じるかもしれません。しかし愛の足りなさから、自分は本当に救われているのだろうか、と疑うことをヤコブが望んでいるわけではありません。ですから、「行い」は、救いの必要条件ではありません。救いは、イエスの十字架に対する信頼によって、完結しているからです。つまり「行い」は、救われた生活を表現するものに過ぎません。

救いは、私たちの「言葉」と「行い」の変化によって、目に見える形で表現されていきますが、人様々です。18 節に「しかし、ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります」と言う人がいるでしょう。行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。」とありますが、「行い」は、霊的成長と関係があるのであって、真の「信仰」は実を伴うのです。ですから、本当のキリスト者の信仰生活には、「信仰」も「行い」もあるはずだということが強調されているのです。

2. 死んだ信仰

14～17 節でヤコブは死んだ「信仰」について語っています。私たちの間に、実質の伴わない、言葉だけの「信仰」話となされることがあります。ヤコブは、「だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。」と言っています。ここで重要なのは、「自分には信仰があると言っても」の「と言っても」です。「私は神を信じています」と言うことと、実際にその人に「信仰」があるかどうかは、別問題なのです。このことについて、イエス様はマタイの福音書 7 章 21 節で「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」と警告されました。また、ヨハネの福音書 2 章 23～25 節にも、「過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。すべての人を知っていたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである。」とあります。ということは、イエス様を信じて、イエス様をご自身をお任せにならないような信じ方があったことを示唆しています。しかもここには「多くの人々が」がそのような信じ方をしているということです。神との関係が確かなものであれば、それがその人の中に働いて、必ず悔い改めにふさわしい実を結びますが、そうでないと、それが実となって現われることはないのです。

ヤコブは、その具体的な例として、15～17 節までのところで言っています。ここでも、「と言っても」が問題となっています。「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい」と言っても、からだに必要な物を与えないなら、何の役にも立ちません。そのような「信仰」は死んでいる「信仰」なのです。すなわち、それは無きに等しい「信仰」であり、全く無意味なのです。

ちょっと待ってください。私たちは何かをしたから救われたのではなく、神の恵みのゆえに、「信仰」によって救われたのではないのですか。パウロはエペソ人への手紙 2 章 8 節で、「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。」と言っています。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。それなのに、そのような「信仰」は無意味だとか、死んでいるというのはおかしいのではないのでしょうか。

確かにパウロは、私たちが救われるのは神の一方的な恵みによるのであり、「行い」によるのではないことを強調しています。私たちが神に受け入れられるのはキリストの義を土台にしているのであって、私たちの「行い」によるものではありません。それが聖書の真理です。しかし、そのようにして始められた救いの御業は必ず「行い」となって現われるのであって、「行い」が伴っていないとすればその「信仰」は死んだものであるか、その「信仰」に何らかの問題があるかなのです。というのは、パウロは、エペソ書 2 章 10 節で「**実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。**」と言っているからです。パウロは、私たちは恵みのゆえに、「信仰」によって救われると述べた後で直ぐに、それは「**良い行い**」をするためだと言いました。つまり、パウロもヤコブも同じ「行い」の伴う「信仰」について語っていたのです。勿論、身体的、精神的、その他の理由でしたくてもできない場合もあります。しかし、そうしたケースは別として、自分には「信仰」があると言っても、それが単なる口先だけの、言葉だけの「信仰」であるとしたら、そのような「信仰」は死んだものであり、全く意味がないものなのです。

3. 見せることができない信仰

次に、18～19 節に「**しかし、「ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります」と言う人がいるでしょう。行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています。**」とあります。ヤコブは、ここで、次の話題に入っています。それは、見せることができる「信仰」についてです。「信仰」そのものは、目に見えないものですが、「信仰」の「行い」は見ることができるのであって、もし見せることができないとしたら、その「信仰」は偽善的な「信仰」なのです。

ある人は、信じているけれどもその「信仰」を見える形で示すことはできないと言いますが、それは正しくありません。というのは、その「信仰」は「行い」によって現わされるからです。言い換えるならば、その人の「行い」を見れば、その人が何を信じているかがわかるということです。「信仰」には、「行い」をもたらす力があるからです。ですから、その人が何を信じるかはとても重要なことです。

そして、見せることができない「信仰」とはどのようなものかを、ヤコブは、19 節で「**あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています。**」と言っています。「**神は唯一だと信じています。**」これは申命記 6 章 4 節の御言葉です。そこには、「**聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。**」とあります。これはユダヤ人の信仰告白です。これはユダヤ人キリスト者に宛てて書かれた手紙ですから、ヤコブは、あえてこの御言葉を取り上げたのでしょう。それは私たちが言うならば、イエスがキリストであり、救い主であると告白するようなものです。なぜなら、そのように心に信じて義と認められ、口で告白して救われるからです。

しかし、驚くなかれ、悪霊どももそう信じているのです。しかし、悪魔は善を行うことはありません。悪霊どもは確かに神の存在を信じており、またキリストが神の子であることも信じています。マルコの福音書 3 章 11～12 節には、「**汚れた霊どもは、イエスを見るたびに御前にひれ伏して「あなたは神の子です」と叫んだ。イエスはご自分のことを知らせないよう、彼らを厳しく戒められた。**」とあります。そればかりか、「**悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないようにと懇願した。**」(ルカ 8:31)とあります。つまり悪霊は、イエス様がさばき主であり、最終的な刑罰の場所があることも信じているのです。そしてマルコの福音書 1 章 23～24 節に「**ちょうどそのとき、汚れた霊につかれた人がその会堂にいて、こう叫んだ。「ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たち**

を滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」とあるように、悪霊どもはそう信じて、身震いしているのです。しかし、信じて身震いすることと、神の救いを受け入れて救われていることは全然違います。本当の「信仰」とは、神の救いについての正しい知識を得て、それを受け入れることです。パウロはこのことを新しい創造と呼んでいます。「ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」（Ⅱコリント 5:17）つまり、新しく生まれ変わる新生の体験なのです。

それは私たちにも言えることです。私たちがバプテスマを受けても、それがただの形式的なものであるならば救われることはなく、私たちが救われるために必要なのはキリストを信じる「信仰」によって、私たちの心が神の御霊によって新しく生まれ変わるることによるのです。それが新しい創造なのです。そのような新しい創造を体験した者は、ガラテヤ書 2 章 20 節に「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」とあるように、全人格的、全生涯的にキリストを受け入れて生きるようになるのです。

「行いのないあなたの信仰を私に見せてください。」と言われても、死んだ「信仰」には命がないのですから、見せようにも見られません。しかし、ヤコブは、ここで「私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。」と言っています。それは決して高慢になって言っているのではなく、そうした偽善的な「信仰」に対する彼のチャレンジであり、悔い改めと神への従順を求める神からのメッセージなのです。

4. 生きた信仰

次に、ヤコブは、21～23 節で信仰の実例をあげています。「信仰」と「行い」を分離して、一方がなくても他方があるからと反対する人たちに向かって、ヤコブは、「信仰」と「行い」とは不可分のものであることを旧約聖書の二人の人物を取り上げて、さらに説明を加えています。

① アブラハムの信仰

「信仰」の例は、アブラハムです。ユダヤ人にとって、アブラハムは「信仰」の父でした。ヤコブによると、そのアブラハムが義と認められたのは、いつのことであったかという、彼がその子イサクを神にささげた時であったと言っています。彼はその「行い」によって義と認められたというのです。しかし、創世記を見ると、アブラハムが義とみなされたのは創世記 15 章 6 節の時点であって、その時なはまだイシュマエルもイサクも生まれていませんでした。人間的に考えれば、アブラハムに子どもが生まれ、その子孫が天の星のようになるという神の約束が実現することが、全く考えられない時でした。それにもかかわらず、アブラハムは神の約束を信じたのです。主はそれを彼の義と認められました。ローマ 4 章 3 節やガラテヤ 3 章 6 節でパウロが言っている「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」という言葉は、この時のことです。

しかし、ヤコブが 21 節で「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、行いによって義と認められたではありませんか。」と言っているのは、それから 30 年後の創世記 22 章の出来事なのです。これは、創世記 15 章 6 節で、その「信仰」が義と認められたという言葉が、22 章のイサクをささげたという「行い」によって実証されたということです。ですから、「行い」によって義とされたということが救われるための条件としてではなく、義と認められる「信仰」は、「行い」によって証明されるということを意味しているのです。

22 節を見ると、「信仰がその行いとともに働き」とありますが、それはこのことを表わしています。元々、アブラハムが生まれ故郷のウルの町を出た時も、「【主】はアブラムに言われた。『あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。』（創世記 12:1）という神の召しに応答してのことでした。アブラハムの「信仰」は、ただ神を信じるというものでしたが、それは生きた神との交わりを通して育まれ、行動となって現われていきました。彼はたくさん失敗もしましたが、それでも神が恵みをもって祝福してくださったので、神への信頼が増していきました。その結果として、神からあなたの息子をささげなさいと命じられた時も、神はイサ

クをよみがえらせることができると信じて、その命令に従うことができたのです。

ここには、「**信仰がその行いとともに働き、信仰は行いによって完成されました。**」とありますが、これは、彼の「**信仰**」がその「**行い**」によって証明されたという意味です。アブラハムの「**信仰**」は、イサクをささげるという神への全き服従によって全うされたのです。このように全うされる「**信仰**」とは、神の約束の言葉を土台として、その御言葉を受け入れ、その御言葉に生きることによって、捨て身になって神に信頼する「**信仰**」なのです。

② ラハブの信仰

「**信仰**」の例2は、ラハブです。彼女は 25 節で「**同じように遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したので、その行いによって義と認められたではありませんか。**」と紹介されています。また、ヘブル書 11 章 31 節に「**信仰によって、遊女ラハブは、偵察に来た人たちを穏やかに受け入れたので、不従順な者たちと一緒に滅びずにすみしました。**」とありますが、彼女は、神に信頼することによって救われました。彼女については、ヨシュア記 2 章に記されていますが、彼女については、カナン人、つまり異邦人で、しかも遊女でした。神の救いは決して、その人の素性や「**行い**」によって妨げられるものではないことがわかります。

しかし、いったいなぜここでわざわざ遊女ラハブのことが取り上げられているのでしょうか。彼女が、取り上げられているのには一つの理由があります。それは、彼女が「**行い**」によって義と認められた者であるということです。つまり、「**行い**」によって、その「**信仰**」が全うされた、証明されたということです。

いったい彼女はどのようにその「**信仰**」を全うしたのでしょうか。25 節には、彼女は、「**使者たちを招き入れ、別の道から送り出したので**」とあります。彼女は自分の命の危険を冒してイスラエルの使者たちを招き入れ、別の道から送り出しました。いったいなぜ彼女はそこまでしたのでしょうか。ヨシュア記によると、彼女はイスラエルにはまことの神がおられ、その神がカナン人を滅ぼされる計画を持っているということを知っていたからでした。つまり、彼女は、その方こそ救い主であると信じていたので、その使者たちをかくまい、自分と自分の家族を救ってほしいと頼んだのです。その「**信仰**」がそうした「**行い**」となって現われていたのです。

結論として、ヤコブは 26 節で「**からだは霊を欠いては死んでいるのと同じように、信仰も行いを欠いては死んでいるのです。**」と言っています。「**死**」とは、からだからたましいが離れることです。たましいを離れたからだは、死んだものであると同様に、「**行い**」のない「**信仰**」は死んでいるのです。

パウロは、救いの根拠としての「**信仰**」を強調しました。救いの根拠には、イエス・キリスト以外の何物も加えられない、と。ヤコブは、救いの結果としての「**行い**」を強調した。また、パウロは神の視点から語り、人は「**信仰**」によって神から義と見なされている、救いにおける神の御業を確認しています。他方、ヤコブは、人の視点から見て、人は「**行い**」によって人から義と見なされるのだ、と、救いに与った人の印を確認しています。私たちは、私たちの「**信仰**」を証明できます。大切なことは、「**信仰**」の生活化です。学ぶだけの「**信仰**」生活では不十分です。御言葉は読むものではなく、「**行う**」ものであり、従うものなのです。

あなたの「**信仰**」は、どうでしょうか。たましいを離れたからだのようにはなっていないでしょうか。私たちは、神の一方的な恵みによって救われました。しかし、本当に神の恵みによって救われたのなら、そこには必ず「**行い**」が伴うはず。もっと神を愛し、神に従い、神の御旨にかなった歩みをしたいという思いが溢れてくるはずなのです。もしそうでないとしたら、もう一度自分の「**信仰**」を吟味し、本当に救いの「**信仰**」を持っているのかどうかをよく調べてみる必要があるのではないのでしょうか。

コリント第二 13 章 5 節に「**あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。それとも、あなたがたは自分自身のことを、自分のうちにイエス・キリストがおられることを、自覚していないのですか。あなたがたが不適格な者なら別ですが。**」とあります。そして、「**行い**」の伴った「**信仰**」、救いに至る「**信仰**」を全うしようではありませんか。